別紙２

# 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：ホセイニ・セイエッド　アヤット

この課程博士学位請求論文の審査は，（主査）田中伸一，（副査）広瀬友紀，矢田部修一，五十嵐陽介（広島大学），吉枝聡子（東京外国語大学）の 5 名によって行われた。公開審査は平成 26 年 1 月 12 日（日）13 時から，18 号館コラボレーションルーム 2 において行なわれた。論文題目は The Phonology and Phonetics of Prosodic Prominence in Persian（ペルシア語における韻律的プロミネンスの音韻論と音声学）である。以下，審査結果の要旨を報告する。

本博士論文は，ペルシア語の韻律プロミネンスに関わる音韻的・音声的特徴を包括的に解明することを目的とした，第一級の独創性を持つ博士論文である。前半は文レベルの韻律階層について新しい提案を行ないつつ，最適性理論の枠組みに基づいて，なぜそのような階層を持つのか，その階層からどのように韻律プロミネンスに関わる諸現象が導かれるのかを明らかにしている。その過程で，ペルシア語の形態統語構造と音韻構造のインターフェイスのメカニズムが浮き彫りにされている。次いで，後半は生成実験と知覚実験を駆使して，音韻的に明らかにされた韻律プロミネンスがどのような音声実体に対応しているのかを明らかにしている。それにより，提案された韻律階層を実質的に裏付ける結果を得ている。

第 1 章と第 2 章では，ペルシア語の基本的な音韻構造や韻律特徴が導入され，先行研究でどのように扱われて来たか，そしてどのような問題が残されているかが説明されている。

それを受けて，第3章では，ペルシア語の韻律プロミネンスを適正に説明するために，韻脚(foot)，音韻語(phonological word)，前接語(enclitic)，後接語(proclitic)などから成る新しい韻律階層の提案を行なっている。ここでは，韻脚は語の右端に1つのみ二項的に付与されることや，機能語は前接語と後接語の2つに区分されるべきことなどの提案が説得力のある形でなされ，さらには接語が連鎖された場合の扱いや例外的な韻律プロミネンスを持つ語の扱いなどにも，巧妙な説明が与えられている。

続いて，第 4 章ではさらに上の韻律階層，つまり音韻句(phonological phrase)，音調句(intonational phrase)，発話(utterance)などから成る階層の全貌が明らかにされ，下の階層とともに各韻律範疇の主要部から文レベルの韻律プロミネンスが導かれるメカニズムを解明している。その過程で，先行研究にてうまく説明されていなかったエザーフェ構文(Ezafe construction)に対する妥当な説明が提示されている。その際，形態統語構造と音韻構造のマッピングに関わる制約群や韻律構造に関わる制約群についての新しい提案を行ない，それらの相互作用からエザーフェ構文に関わる現象が導かれるとした。

こうした音韻的な韻律階層全体から導かれる構造では，文レベルには複数のアクセン

トが現れながら最後のアクセントに最も高いプロミネンスが与えられると予測されるが，第 5 章はこの予測が音声的に裏付けられることを，生成実験と知覚実験に基づいて報告している。そのように解釈される理由として，最後のアクセントは他のアクセントと異なる音声実質を持つ（F0 値はやや低いが長い持続時間を持つ）こと，そして最後のアクセントのみ直後にアクセントがない（急激に F0 値が下がる）ことなどの結果を得ている。

本論文の評価として，その新しさや意義を挙げるなら，次のようにまとめられよう。まず，記述的な価値として，機能語をうまく前接語と後接語の2つに区分するなど，これまで説明が不十分だったペルシア語の韻律階層の全貌を明らかにしたことは，韻律音韻論にとって大きな貢献といえよう。また，これも説明不十分だったエザーフェ構文に妥当な説明を与えたのも，ペルシア語音韻論にとって大きな意味を持つといえる。さらには，理論的な価値として，ペルシア語の形態統語構造と音韻構造とのインターフェイスのメカニズムをミクロとマクロに渉って明らかにしたことは，今後のインターフェイス研究に重要な手がかりを与えるであろう。もちろん，これらを裏付けた実験についても，デザインおよび分析手法は極めて洗練されており高い水準にある。実験結果それ自体は，既存の音声理論の発展に貢献するような意外性のあるものではないが，研究が十分でないペルシア語の韻律に関する新たな知見を与えるものであり，その意義は大きい。つまり全体としては，ペルシア語の音韻論と音声学の両面において，韻律に関わる包括的かつ統合的な成果をもたらしたことは高く評価できる。

ただ，予備審査では，ペルシア語のデータやそのスタイルについて，あるいは提示データの別の説明可能性について，いくつかの疑義が提出された。また，実験についても，その手続きや手法などに関する疑義や問題が指摘された。これらは修正・改善された上で最終論文が提出されたが，最終審査においても，実験結果に関わる解釈などを中心にいくつか確認・説明が求められる項目があった。また，前接語あるいは後接語とわたり音(glide)の出現との関係についても，未解明の問題が残されていることも指摘された。しかしながら，これらは全体の価値を揺るがすほどのものではなかったので，総合的には，形式・内容ともに水準以上であるとの審査員全員の合意を得たので，審査委員会としては博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと認定する。